



同世代に手話広げたい

県大看護学部4年の徳永さん

サークル立ち上げ学生指導

県内最年少の県登録手話通訳者として活動する徳永旭さん(22)＝高知県立大学看護学部4年＝が、同大学内に「UOK手話サークル」を立ち上げて活動している。看護、社会福祉、健康栄養の3学部の学生ら約60人が参加。徳永さんは「医療や福祉の現場はもちろん、手話通訳などのいろんな場面で活躍できる若い世代が増えたら」と話している。

「お昼ご飯何食べた？」
「サバのみそ煮」
「私はオムライス」
10月半ばのある夜。高知市池の同大学池キャンパスの一室で、学生たちが両手を器用に動かしながら雑談を楽しんでいた。

手話を器用に動かしながら雑談を楽しんでいた。同サークルは週2日活動し、この日は上級者が集う日。徳永さんの指導の下、メンバーたちは手話の読み取りや表現を学んだ。徳永さんは室戸市出身。先に手話を学んでいた母親に連れられ、羽根小5年の頃に「中芸手話サークルぬくもり」に参加。言葉を発しなくてもコミュニケーションが取れる手話言語の魅力に引かれ、以来手話を学び続けている。

聴覚障害がある知人や友人が増え、日常生活にさまざまな不便や困難があることを知った。入院先での意思疎通に困ったり、夜間に体調を崩しても手話通訳者なしでは不安で、救急外来を受診しなかったり…。病院に関する困りごとが多いと感じ、看護師を志すようになった。

「看護師は患者さんの近くでサポートできる。医師や薬剤師との橋渡しをして、ちょっとした環境を変えられたらいいな。医療・福祉業界に手話ができる同世代を増やそうと、1年生の秋にサークルを立ち上げ、活動を引っ張ってきた。メンバーは10人ほどから徐々に増加。手話を学ぶ場を探していた高知大医学部生も参加している。日々の活動に加えて、県立大健康長寿センターの動画配信サイトにサークルと連携し、災害時の聴覚障害者支援について情報発信。福祉イベントで体験ブースを出すなど、啓発活動にも力を入れている。この3年間で、知識ゼロから始めて全国手話検定試験1級を自指すほど上達した仲間もいる。学業の傍ら、県内の講演会などで手話通訳の仕事も担っている。徳永さんは「社会に出た後も手話を学び続けて、理解や普及を進める人が増えていってほしい」と期待を込めている。(松田さやか)